

## 岡山美術蔵 能衣裳

## 美術工芸研究室

こゝに紹介する能衣裳3領は、いずれも旧岡山藩主の池田家に伝えられていたもので、現在は岡山市内にある財団法人岡山美術館におさめられている。池田家から直接に岡山美術館におさまったものが大部分で、少数のものが他家へ一度移って、その後この美術館に入ったものであると聞く。しかし、いずれにしても全部がかつての岡山藩主池田侯所蔵のものであった。総点数300領に及ぶ。300領のうち、すでに重要文化財に指定されている作品は2領ある。いずれも縫箔の作品であるが、その1領の「芦に水禽文様縫箔能衣裳」は、素晴らしい立派な作品で、時代性をよく表現し、繡技も完璧に近い手法をみせて格調高い作品で、桃山時代の縫箔能衣裳遺品中の白眉ともいえよう。

このような作品をもつ能衣裳の一群であるが、全部が全部すぐれた作風をもつ作品とはいえない。全部について云えることは、保存がよいということ、これらの能衣裳は岡山藩主池田家に伝えられていたもので、そのまま美術館に収蔵されているということである。したがって、これらの能衣裳は岡山藩における能楽の消長を研究するにほ何よりの好資料であろう。今回、調査した一部の能衣裳の中から注目すべき3領を紹介したい。

## (1) 白地菊桐すずき貝文様縫箔肩裾 1領

丈 135.1cm 袖 57.5cm (第1図)

この肩裾は、肩と裾を雲形に仕切り、肩部と裾部に金箔箔をほどこし、それに見事な刺繡を行った縫箔である。肩部、裾部にほどこさされている刺繡は、菊花、桜花、桐花、すずき、貝類の文様を紅、紫、黄茶、萌黄、縹、白、浅黄、うす紅色の色糸で刺繡しているが、すずきの穂以外は撚糸を用いず釜糸を使用している。

白の細糸や色糸で手縫いの上を押えているが、これは手縫いのほつれを防ぐためであり、文様をさらに立体的にみせる効果的技法でもある。白と紫の細糸の撚合せですずきの穂を表現しているが、刺繡におけるこの表現は桃山期の一つの特色ともいえる技法であろう。また、桃山期の刺繡によくみられる一見、不自然に思われる色分けの方法を、花や葉などに行っている。

胴の白地の部分には流水に水藻が金泥と浅黄色の染料で描かれているが、肩や裾の繡法に比べて同時代のものと考えられない。後日描き加えられたものであろう。水と水藻を選んだ理由は、肩部と裾部に貝類が刺繡されているため、海賊文様とみたてての補筆と考えられる。

この肩裾も仕立直しが行われて前身の袖には美しい縫箔が見られるが、上部で両袖ともはいであるために文様がその部分だけ逆に出ている。後身の両袖には縫箔が殆んどみられないという状況で、流水と水藻を描き足したのはこの修理がなされた時ではあるまいかと、想像される。

このような補修、後補はあるが、桃山期の繡技を知るにはまことに好資料である。

第1図 白地菊桐すずき貝文様縫箔肩裾

(2) 紅縹白染分松樹文様縫箔 領 丈111.0cm 裾 88.0cm (第2図)  
右から左へ幅25cmの紅、縹、白の斜線を染分けにして、後身の裾中央より一本の松樹を前身にかけて大胆に構図している。また、後身の右袖から肩部に松樹を一本出す。後身は、裾中央の松樹と肩におかれた松樹で松樹文様を構成し、前身は後身の裾よりの松樹が両袖と裾の部分に枝をのばした構成である。紅、縹、白の斜線の内部には金と銀の方形の箔を釋に出しているのはおもしろい。

第2図 紅縹白染分松樹文様縫箔

松の幹は茶、松葉は萌黄と浅黄色で手織いを主調とした繡技は精巧で、色数を少くした松樹を、紅、縹、白の斜線の上に雄々しく浮べた効果は凡な着想ではない。織分けにしないで染分けにしたのも古調だし、繡技もまことに巧緻で、すぐれた文様構成とともに注目すべき作品で、江戸初期の作とみたい。補修もなく保存もいいのがさらにこの作品の価値を高めている。

3 白綸子地松竹梅桜花橘宝尽し文様縫箔肩裾 1領

丈 144.5cm 衿 63.5cm (第3図)

肩裾の形式をとる縫箔である。胴を肩と裾に仕切るのに松皮菱崩しで仕切って、胴は白くぬき、肩部と裾部は黒染めに出す。黒染めにした肩、裾の部に種々の文様を小文様形式にして刺繡し、文様の隙間に霰形の金箔を置く。肩部にも裾部にも松皮菱崩し文様を全面にわたって横にわたし、その外縁を紅糸で繡って区劃している。肩部には3カ所、裾部には4カ所あるが、その内には宝尽し、梅花、菊唐草文様のみを刺繡し、それ以外の地には橘、桜花、松、竹笹を刺繡しているが、その繡技はまことに精巧細緻といえよう。金糸、白、紅、萌黄、浅黄色の糸糸を地色の黒地に対し巧みな配色効果は、この作品の格調を高くしている。宝尽し文様には細糸の撚糸を使用しているが、他は釜糸を使用し、さし繡、駒繡いの繡法がその主軸をなしている。

全体の文様が小さい文様であるにもかかわらず、繁雑さはなく厳正感を与えるのは、一糸一糸をゆるがせにしない繡技の結果であろう。黒地に映える金色と糸糸の配色の巧みさは、繡技の精巧さと相俟って

すぐれた作品をつくりあげた。

江戸時代初期の後期頃の制作と考えられるが、損傷は殆んどなく保存もよい。生地が綸子であることからして、能衣裳としては着付に使用されたものであろう。池田家の伝来では縫箔とされているが、まさしくさうである。江戸初期の繡技を知る貴重な資料といえよう。

(守田 公夫)

第3図 白綸子地松竹梅桜花橘宝尽し文様縫箔肩裾